
A r mored Core Another Story

TaMaNeGi@シャルル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Armored Core Another Story

【Nコード】

N5372X

【作者名】

TaMaNeGi@シャルル

【あらすじ】

放浪の旅を続ける青年、管理者の居なくなつた世界で様々な騒動に巻き込まれ彼は一体何を思う・・・。

ベタベタなあらすじ？でめんなさい。

注：オリジナルなACパーツも出てきますが何卒ご了承ください。

第一話（前書き）

アーマードコア3の管理者破壊後の世界を背景とした物です。

第一話

AC3の管理者破壊後の世界での二次創作小説です^^

001

「はあ、困った・・・」

砂漠のど真ん中を突っ切る大きな道路で彼・レヴィンはため息を付いていた。

「所持金22Cか、これじゃ宿で一晩も泊まれやしねえ。世の中全てが金じゃない。なんて綺麗事だよな、ほんと・・・」

愚痴をこぼしつつレヴィンは端末の地図機能を使う。

先程軍の放棄された車両の中から見つけた端末だ。

「ここから一番近い宿場はつと・・・」

検索し結果が表示される。

「マジか、車で4時間って・・・。徒歩ならどれくらいだ？想像もつかねえよ。単純に倍に計算したって軽く8時間超えてんじゃん。冗談キツイよ。」

下がり気味なテンションをさらに下げて言った。

ここは広大な砂漠のど真ん中、道路はあるとはいえこんな砂漠だ。車なんて殆ど通っていない。こんな状況に置かれたら誰だってこうなるだろう。

しかし、レヴィンは。

「グダグダ言ってたってどうにかなる訳でもないしな。ここは素直に歩くしかないだろ。幸い食料は結構あるし。」

と言って自分を無理やり励まし足を進める。

ただ、砂漠の恐ろしいところは何といっても夜だ。

気温は極度に冷え風が強くなる。暖を取らずに外にいたら確実に言っている程死ぬであろう。

レヴィンにもそれくらいは分かっている。彼は日も暮れてきたところで今夜の寝床を探し始めた。

「まあ、固形燃料はあるから焚き火はどうにかなる。問題は風よけが出来るお手頃な岩場か何かが見つかるかどうかなんだよなあ。」

そうそう、うまくいくはずも無く。寝床探しにはかなりの時間を費やしてしまい、岩場が見つかった頃にはもう日が沈んでいた。

場所はある大きな道路からちよつと離れた所だ。

「やばかったな、もうすっかり日が沈んでんじゃん。見つかった良かった。」

と胸をなでおろしているレヴィンであった。そうこうしているうちにすっかり日は暮れて辺は真っ暗になってしまった。

「さて、火を焚いてメシ食ってさっさと寝るか。明日だって歩くんだし。まだまだ先は長いな。」

結局、一番近い宿場街までまだ4分の1程進んだ程度である。

その日その日の行き辺ばったりな放浪生活。

しかし思いの外レヴィンはこの放浪生活を楽しんでた。

何故なのかと以前にも何度か考えた事があったがその時にもはっきりとした理由を断言することが出来なかった。

もちろん今もそうなのだが。

ただ、感覚的に以前の生活をしていた時に無かった『何か』がそこにはあった。

これだけは言えるのだろう。そんなことを思いつつ彼は眠りに就いた……。

第二話

002

翌日の早朝レイヴンは夢から目を覚ました。

「はあ、はあ、はあ・・またあの夢か。最近めっきり見てなかったのによ。一体なんだってんだ。」

寝て体力を回復するどころか疲れた顔をしてしていた。

その『夢』とは？

こんな時であれだが元々彼はレイヴンなのだ。

そう、人型兵器 AC (Armored Core) を駆り企業などあらゆる団体、個々人から依頼を受け戦場を縦横無尽に駆け巡るそのパイロットが『レイヴン』と呼ばれる傭兵達であった。

ACの戦力ははそのパイロット『レイヴン』に依存することが多く殆どの『レイヴン』がグローバル・コーテクスと言う管理組織に登録され管理されていた。

彼もほんの3年程前まではそのうちの一人に過ぎなかったのである。それ以前、彼がレイヴンを辞めた時から5年ほど前、人類初の偉業を行なっているのだがそれはまた後で話そう。

そして、彼が見ていた『夢』というのも彼が『レイヴン』だった頃に由来する。

その内容が一緒に同じ依頼に出撃した僚機が戦場で出て来た敵AC側に寝返り裏切られ命からがら撃破すると言う夢だ。

しかも、相手を撃破するときの声のはっきりと聞こえるのだ。

断末魔のように。そして徐々に今まで撃破してきた敵の悲痛な叫びが聞こえてきてそのまま朝になる。

といった具合だ。

「最悪だよ・・。朝からこんなのナシだった。」

やんなっちゃうよ、と愚痴をこぼし支度を始める。

支度と言っても保存食を軽く食べ、焚き火の火を消す位だが。取り敢えず今日の目標移動距離を決める。

「まあ、今の時点で4分の1進んだ訳だから今日は頑張って半分まで行きたいね。」

目標を決めて、

「よっし、行か！」

と意気込んで洞窟を後にする。

「ふう、結構歩いたな。」

と言葉を漏らす。昼間になり大分日が昇っている。

そろそろ正午になるのか。そんなことを思いつつ。

携帯端末を見て意外と進んでいることに気付く。

昨日は止まりながら休憩もしていたが今日は全くとっていい程していない。

勿論、水分や食料は摂取しているが立ち止まらずにでも出来るのでそうしているのだ。

おかげで結構な距離を進んでいる。

その他にも、天候も要因の一つだろう。砂漠では珍しく今日は曇なのだ。

暑すぎず、寒すぎず。かなり動きやすい天気であった。

「いやー、意外と今日はツイてるな。まあ、あんな夢を見たんだこれくらいな事が無いと割に合わないってもんだよ。」

そんなどうでもいい独り言を言いながら歩いていると。

「ちょっと、やめてください!!」

なんだ？ 声のトーンからして女の子？

「おいおい、そんなつれねえこと言うなよ。第一俺たちが乗せてくれて頼んだら快く乗せてくれたじゃんよ??」

これまた、変な野郎だな。

「それはっ・・・！ あなた方が困っていらしたからであって別にそう言う事じゃ無いです！！！」

気になったので声のする方まで行ってみた。するとライフルを持った男二人組みが女の子をナンパ？していた。

「そんな事言わねーでさー。 いいじゃん？ ちよつとぐらい。」

と一人が迫りジープから少女を強引に降ろさせた。 ひでえな、最早ありやナンパなんてもんじゃ無いな。 もう半分脅迫に近い。 なにせ手にライフル持ってんだもんなあ。

「タチ悪いなありや。 どうするよ？ いっちょ助けに行く？ でもな、面倒事はゴメンなんだよな。」

「つつても、こんなの見過ごせる訳もねえだろう。 相手の女の子めっちゃ困ってるし。 つーか、あいつら一体何処の軍だ？ いや、軍じゃないのか。 あんなライフルだけのお粗末な装備な訳ねえもんな、企業の正規軍がさ。 んじゃ、ゲリラか？ だったら、尚の事だな。 見過ごす訳にはいかない。」

「と言い、こっちの装備を確認する。」

ハンドガンが二丁にその予備弾倉がそれぞれ一個づつ。

あんな、カッコイイ事を言っては見たもののぶっちゃけ不利に違いは無かった。

まあ、あんな野郎どもを相手にするんなら何とかなんだろう。

とか落胆的な事を考えつつ、忍び足で敵に近づくレヴィン。

運良く相手からこちらは見えない所にいる。 物陰に隠れながらギリギリまで近づいていき・・・。

タタタツ。

小走りで相手にの背後に近付き、銃を構える。

” スチャ ”

「動くなよ。 １ミリでも動いてみる、あんだ等の頭に風穴が開くぞ。 その子から離れるんだ。」

「って、てめえ。 いつの間に！！？」

”バン”

威嚇のために敵の足元めがけて銃弾を放った、つもりだったのだが・
・・。

「いってえ!!」

反対側で銃を構えていたもう一人の足に当たってしまった。

『しまった!!威嚇のつもりが足に!?!こうなっては仕方ない・・・
。』

「聞こえなかったのか? もう一度言うぞ、その子から離れろ。そして銃を捨てて地面にうつ伏せになれ。」

「くっ・・・。」

だめだと観念したのか、二人は銃を捨てうつ伏せになった。

そのままレヴィンは二人が持っていたライフルを取り上げると。

「逃げるよ! ジープに乗って!」

と顔をゲリラに向けたまま少女に話しかける。

「は、はいっ。」

彼女は困惑していたようだが言われたとおりジープの運転席に乗りエンジンをかける。

そしてレヴィンも乗り込む。

「出して!!」

それを聞いた彼女はジープを発進させた。

第三話

003

「さっきは助かりました。ありがとうございます。」

と彼女はジープを運転しながらレヴィンに礼を告げていた。それに対しレヴィンは、

「いいよ、そんな。気にしなくてさ。」

照れくさそうにそう答える。

「そう言う訳にもいきませんよ。助けてもらっておいて気にするなんて、それこそ無理な注文です。」

それもそうか、とレヴィンは思った。

「そういえば、自己紹介がまだでしたね。私はラミュといいます。呼ぶ時は普通に呼び捨てで構いませんよ。」

と明るく話しかけてくる。

初対面の人間に呼び捨てでいって言うっちゃうのね……。度胸あるというかなんというか。

「俺はレヴィン、キミが呼び捨てでいって言うんならこっちも呼び捨てで呼んでくれてオッケーだよ。」

まあ、俺が呼び捨てしてるのにあっちがかしこまってちゃ変だしな互いに呼び捨てで呼び合う方が自然だろう……。

と思っていると。

「そんな!!!? 恩人の御方を呼び捨てにするなんてもってのほかです!さん付で呼ばせていただきます。むしろ様付で呼びたいくらいです!」

「いや……。別に俺が呼び捨てでいって言うてんだからそんなかしこまなくても……。ねえ? と言うか様って……。」

「いーえ、親しき仲にも礼儀ありっていうでしょう?つまりはそう

いう事です。まあ様は言い過ぎかもしれませんが。」

「そ、そう……。まあ何でもいいよ。」

「つか、もう『親しき仲』なんだ……。なんか色々と凄いな、彼女・。」

とか何とか考えていたら。

「じゃあ、レヴィンさんって呼ばせてもらいますね?」

「ああ、いいよ。りょーかいです。」

「いかん、かなり棒読みになってしまった。

それを察したのか、

「なんか不満でもあるんですか?」

と彼女・・ラミュが頬を少し膨らませて訝しげに聞いてきた。

「やべえ、カワイイ!!こんな隣でやられたら対応に困るって!!!」

そんな風に焦りながらも、

「いやいやいやいや、不満なんてないよ!!これっぽっちも。

ね??。」

「まずい、我ながらかなり動揺してしまった。イカンイカン。とりあ

えず落ち着け。」

「そーですか!ならこれからそう呼ばせてもらいますね?レヴィン

さん!。」

俺の回答待つ前に既にそう呼んでるし……。まあ、いいや。明るい

娘は嫌いじゃないしな。

「わかったよ、んじゃそう呼んでくれ。ラミュ。」

「はい!そうします!。」

とラミュは快活に答えた。

「そういえば何でゲリラ?なんかに絡まれてたの?」

レヴィンは一番気になっていた事を聞いてみた。まあ、けれども何となく想像はついてはいるが。

「あゝ、それは。あの人たちが乗せてくれって言うんで仕方なくです。困っていたみたいだったんで。」

「それで乗せちゃったんだ……。銃持ってた時点で危ないとか、怪

しいとかつて思わなかったの？」

「うーん……。あんまりその時は深く考えてなかったですね。」

深く考えようよ……。とレヴィンは心の中で少しあきれていた。

というか、その度胸の良さは尊敬に値するな。などと冗談混じりに考えていると。

「レヴィンさんの方こそどうしてあんな所にいたんです？」

「うん？ 俺はあそこの近くの岩場に野宿してたんだよ。」

「野宿ですか！？よくまあ、砂漠のど真ん中でそんなことしようと思えますね。凄すぎです……。」

とラミュは呆れた様に言った。レヴィンにしてみたら彼女の迂闊な行動の方がよっぽど危ないと思った事だろう。

「じゃあ、もう一つ質問です。何で野宿してたんですか？」

「……。えーっと、全部話すとややこしくなるからあれなんだけど。俺は放浪の旅してるんだ。」

「それじゃあ行くあても特に無かったんですか？」

「そうだね、あては無かったけど目的地ならあるよ。」

「目的地ですか……。でもこの方向だと村が一つあるだけですよ？」

「ん？ 村ってこの事？」

と言ってレヴィンは持っていた携帯端末の地図を開きラミュに見せる。

それを見たラミュは。

「ここ、私の村ですよ。」

「えっ！？ そうなの？？」

「ハイ。下の世界から移住してきてかれこれ8年程経ちますね。」

「そうだったのか……。良かった。」

「どうしてです？」

「だって、直接目的地に行けるじゃん。歩かないで大丈夫だと思うと気が楽になったよ。」

「あー、そういう事ですか。」

そんな他愛も無い会話をしていると、

「つきましたよ、ここが私の村です!」

第四話

004

「ただいま〜。」

元気にあいさつをするラミュ。

「あら、お帰りなさい。ちょっと遅かったわね？」

ラミュの母親と思われる人が返事をする。

それに続けて

「おや、帰ったのか。おかえり。」

と老人も挨拶する。

どうやらおじいさんのようだ。

「それで、後ろにいる人は誰？」

「この人はレヴィンさん。砂漠で助けてもらったの。」

紹介してくれたラミュに続いてレヴィンも、

「レヴィンです。こんにちは。」

と挨拶をする。

「ラミュの母親のラーシャです。」

と返事をして、隣にいた老人が続く。

「わしはラミュの爺のガイルじゃ。助けてもらった、と言ったな？」

一体何があつたんじゃ？」

とガイルがラミュに尋ねる。

ラミュはレヴィンの方を一瞥して、

「私が砂漠でゲリラにナンパされてた所を助けてもらったの。」

「ほう、ゲリラをな・・・」

意味深な表情をするガイルそしてラーシャが、

「まあ、そうだったんですの。それはそれはありがとうございます。」

「

とレヴィンの方を向き深々とお辞儀をする。

「いえいえ、そんな当たり前の事をしただけですよ。困っていたらお互い様なんですよ。」

とラーシャに向かって言う。

ラーシャは、

「優しいんですね。」

と柔らかな笑顔を向けた。

それを見ていたラミュが。

「そうだ、お母さん。レヴィンさん放浪の旅をしてるんだって。それで何日かここに泊めてあげられない？」

とレヴィンが言おうとしたそばからラミュが先に言ってしまった。

「それくらい、全然かまいませんよ。ですよ？おじいちゃん？」

「まあ、特に拒否する理由もないわい。まして、ラミュが連れてきた男ならなおさらじゃて。」

「ちよつと！おじいちゃんそんなんじゃないってば。」

と困ったように頬を膨らませて言う。

レヴィンは思いの他この表情が好きだった。

そんなこんなでラミュの一家に当分お世話になることになったレヴィンだった。

ラーシャの料理はどれも絶品でとても美味しかった。

おじいさんのガイルは様々な砂漠で生き残るための知識を教えてくれた。

他の村人達もとても親切にしてくれて、レヴィンは感謝していた。

そんなある日の夜。

居候を初めて三日目の夜だった。

中々寝付けず困っていたレヴィンは散歩に出かけていた。

どうも寝付けない、昨日と一昨日はぐっすり眠れたというのに。

一体どうしたのだろう？

そんな事を考えていたらいつの間にか村の外れまで来てしまった。

「やっべ、こんな所まで来ちゃった。さっさと帰らないと。」

と言いつつも辺りを確認するように見回す。

「まあ、軽い見物みたいな感じでちょっと向こうの方も廻ってみようかな？」

そんな軽い気持ちで周囲を探検？しだすレヴィン。すると、妙な扉を見つけた。

「なんだこれ？」

そこはどう見たって崖の岩肌だ。しかし扉があると言う事は何かの中に隠されているのだろうか？

だとすると一体何があるのか？

位置的には村の入り口から反対側にずつと行った所だ。

「こんな所にいったい何が？」

ガララララ……。

気になってしょうがないのでレヴィンは扉を開けた。

そこには洞窟があつた。しかし、ただの洞窟ではなかった。

何故ならそこにはACアーミー・コアがあつたからだ。

「ちよつ、何でこんな所にACがあんだよ？おかしいだろ……。」

ACを見たレヴィンはそんな事を呟いていた。

「しっかし、古い機体だな。見た感じもう何十年も動かしてなさそうだな。」

彼自身元レイヴンだ、機体の保存状態位一目で分かる。そんなに良いとは言えそうにない。

パーツ構成も古くアセンもかなり基本に忠実な構成であつた。

「ライフルにブレード、背面にミサイル、リーダー。コアはどうやらミサイル迎撃機能の付いた通常型か。」

ただ、どれもやはり旧型の武装であつた。

「うーん……。MT相手なら何とかなるとは思うけど、ACが相手だとキツイな。」

率直な感想を言うレヴィン。レヴィンのセリフに出てきたMTと言うのは、ACの基になった人型兵器の事である。

ACに比べれば確かに性能は見劣りするが、生産性、操作性がよく、

大抵のパイロットにもそれなりに操縦出来るため様々な企業が開発・研究をA Cが開発された後も続けている。

などと、A Cをうかがっていると不意に背後の村の方から大きな爆発音がした。

「！！？ 一体何が・・・村が焼けてる！」

何が起こったのか分らないままレヴィンは村へ走った。

第五話

村に戻るとそこには5機程のMTがいた。

「なんでこんなところに・・・。」

驚きを隠せないレヴィン。

「企業の部隊・・・ではなさそうだ。じゃあ、ゲリラ・・・?!」

レヴィンはそう思った、何せ襲撃に来ていたMTはメーカーがバラバラだったのだ。

十中八九ゲリラであろう事は容易に想像がついた。

「しかし、なんだってこの村を襲っているんだ?」

一般的に考えれば、物資の強奪とも思えるだろうが、そうするのであれば脅して物資を引き渡させれば事は済む。

なのに、彼らは村ごと焼き払っているのだ。

レヴィンも同じことを考えていたようで、

「物資の強奪が目的でないとすると一体・・・まさか!!あの時の報復に・・・?」

あの時とは、レヴィンがラミュを助けた時だ。

威嚇のために撃った銃弾が、ゲリラの足に当たってしまったのを思い出した。

「そんな事が原因とは考えにくいけど、だとするとマズイな、目標は俺かもしくはラミュ・・・。」

と思考を巡らせていると、

「レヴィンさん!!」

と彼を呼ぶ声が。

「ラミュ! 大丈夫だったのか!？」

「ハイ、何とか。村の皆の非難は終わりました。後は私とレヴィンさんだけです。」

「非難って、どこに?」

「北のほうに洞窟があつてそこを万が一の時の避難場所になっているんです。」

「ここからどれ位？」

「3キロといったところでしょいか。」

『3キロじゃ駄目だ、誰もいないと分かったとたんにこの周囲を搜索する筈。それで見つかったらひとたまりもない。』

「レヴィンさん・・・？ どうしたんです？」

「ん、ああ。ラミュだけで先に行つてくれ。こいつらは俺が。」

「俺がつて、一体どうするんです？！ そんなことより早く非難を！！！」

ラミュが心配するのも無理はない。何せ彼が元レイヴンで、西の大きな洞窟にACがあることも知らないのだから。

「大丈夫！ 西の方にあつた洞窟にACがあつたんだ、それに乗つて奴らを追い払う。」

「西の洞窟に？ あそこはこの土地神様の祠があるはず・・・。」

「そうなのか？ とにかくそのACを使う！！ だから先に・・・。」

先に非難をしてってくれ、そう言おうとした時燃えた家の破片が二人の間に落ちてきた。

「うあつ！！？」

「きゃっ！！！」

間一髪二人はかわしたが、ちょうど二人の真ん中に落ちたためにお互い相手から離れてしまった。

「レヴィンさん！」

「先に行つてゐるんだ！ こいつらを片づけてすぐ行くから！！」
そう言つてレヴィンはあのACの元に走つて行つた。

第六話（前書き）

レヴィンがやつと元レイヴンらしくなって来ました。

ちよつとACの構成パーツにオリジナルな部品がありますがご了承ください
m ((m

第六話

006

「はあ、はあ、はあ。」

今レヴィンはあの洞窟の入口にいる。

息切れしているのは村から全速力で走ってきたからだ。

「よし、起動、させるぞ。」

そう言つて彼はACのコックピットに入る、が。

「おいおい、マジか・・・。」

彼が驚いたのも無理はない、なにせその機体のコアはタンデム型、所謂二人乗りの機体だったのだ。

通常ACのコアにはパイロットが一人乗り全ての操作を行う。

全てとはいえ、レーダーの感度の細かい調節や敵の判別・ロックオン、地形情報、機体の状態確認等は基本的にACのOSが処理してくれる。

なので、戦闘ヘリ等と言う所のレーダー通信士が不要なのだ。

ACが登場したての時は複座の機体もあったと少なからず聞いてはいた。

この機体は複座。これの意味する所は一つしかない。

「てことは、レーダー員が必要なのか!? 全くいつの時代の機体だよ・・・。一人で動かせんのか? これ。」

今でこそOSが発達してそこらへんの処理を全て行っているとはいえ、それでもパイロットには結構複雑な処理を要求されるのだ。

「考えてる暇はない! 一刻を争う事態なんだ。やるしかない!」

レヴィンは自分自身を奮い立たせコックピットに乗り込む。

「システム起動・・・、システムチェック開始・・・通常モー

ドスタンバイ」

無機質なアナウンスが流れ始める。

「「システムチェック・・・オルグリーン、カメラ起動」

ウィイイン・・・という音と共にコックピットのモニターに外の景色が映し出される。

「「レーダー起動・・・熱源感知、システム戦闘モードスタンバイ」

「早くしてくれよっ!。」

本来ならレーダー員がやることもOSに任せているので起動に時間がかかる。

「「火器管制システムチェック・・・オルグリーン、各部異状なし、戦闘モード起動します」

「よし行くぞ!!。」

ブースターを吹かせ一気に洞窟を出ていくレヴィン。

第七話（前書き）

毎回読んでくださっている方々、いつもありがとうございます（＾＾）

第七話

007

「こんなもんですかね、頭？」

と、MTに乗ったゲリラがリーダー機とおぼしき機体に無線を飛ばす。

「まだだ、あのスカした野郎をとつちめるまでだ！」

頭と呼ばれる人物が答える。

「しかし、もうあらかたぶつ壊しちまいやしたぜ？」

その返答にもう一機の機体のゲリラが答える。

「そうですぜ、これ以上やったらここを利用できなくなつちまいやす。」

さらにもう一機も答える。これに対し、

「まだだつつつてんだろうが！！ 聞こえなかったか？？ 奴を見

つけるまでやめねえよ。」

声を荒げてこう答えた。もはや冷静な判断力は残っていなかった。

獲物に飢えた獣のようであった。

その気迫に押されてか、部下と思われる者たちも渋々従っていた。

「全く・・・、なんだってんですかい。 ん？ レーダーに反応が？

！ これは・・・！！」

一人の部下がレーダーに映る一つの影を捉えた。

「お頭！！ 敵です！」

「何だと！！？ MTか？」

「いえ、単機でこちらに真っ直ぐ来ています。 このスピードはM

Tじゃない・・・。ACです！！」

「くそなんだってこんな時に！！」

「頭、ここは撤退を！！」

「そうですね、退くのが得策かと。」

信頼している部下の言うことだいつもの彼ならここで大人しく撤退していただろう、しかし今日はいつもとは違っていた。

「いや、迎え撃つ！ この俺を邪魔した奴は許さん！！」

「頭……。」

「無茶ですぜ！！ 弾薬ももう少なくなっちまってやす。 AC相手じゃ厳しいですぜ！！」

「五月蠅せえ！ がたがたぬかしてんじゃねえよ。 こっち方が数が上だ負けやしねえ！！ それとも俺を裏切るのか？」

「い、いえ。そういう訳では……。」

「だったらさつさと迎撃準備だ！！ 接敵までは？」

「あと90秒です！！」

「ようし……、全機兵装をミサイルに変更。 射程に入り次第攻撃開始！！」

「りよ、了解です！！」 x 4

もはや本来の目的すら忘れて命令を飛ばすゲリラのリーダー。

彼は鬱憤を晴らせれば何でも良かったのだろうがこの選択がアダになるとは思ってもいない。

第八話（前書き）

やっと戦闘シーンに突入です（^^）
感想とかいただけたら嬉しいです^^

第八話

008

「本来ならOBを使つて一気に接近したいところだけどここの機体じや一発で熱暴走だな。」

オバード・ブースト

OB緊急加速装置とでも言えいいだろうか。

大量のエネルギーと熱量との引き換えに通常では出せない速度で移動する事が可能である。

ただし前述した通り莫大な熱量とエネルギーを消費するので古いこの機体では文字通り”緊急用”なのだ。

今でこそ技術が進み熱量、消費エネルギー共に抑えられてきたとは言え、それでも結構な負担を機体にかける事になってしまう。

この機体で使つたらどうなるか想像に難くは無い。

レヴィンはそれを思い通常のブースト移動で接近しているのだ。

「よし。もう少しで射程に入る。」

といい、兵装を右手のライフルから肩のミサイルに変更する。そして・・・

「きた!!」

という声と同時にミサイルを発射する、それはゲリラ側も同じだった。

違う所と言えばその数であろうか。

レヴィンが放つたのは2発しかも5機いるうちの1機しか狙えない。それに対してゲリラのMTはそれぞれが2発、合計で10発のミサイルを放っていた。

しかしレヴィンは臆する事無くキレイにミサイルを回避する。そして放つた2発のミサイルが1機のMTに命中する。

「ぐあああぁっ!!・・・。」

撃破を確認したレヴィンは次の目標に切り替える。

兵装をライフルに変更し弾丸を相手に撃ち込む。

「ぐはあっ……。」

ここでアラートがなる。

「ロックされたか……！」

見ると反対側にいたMTがミサイルを放っていた。

しかし、レヴィンは行動不能になった敵MTを障害物にしてこれを避けると今度はそいつに向かって行く。

「やっぱりどこまで行こうとゲリラはゲリラだな。」

どうやら敵は仲間が2機やられたことで焦っているようだった。

結局は訓練された正規企業軍や、ACを駆るレイヴンなどに勝るような操縦技術や集中力は無い。

ミサイルを放った3機目も簡単に撃破されてしまう。

残りは2機。

小刻みにブースターを吹かしてエネルギー（以下EN）を絶やさなようにしつつ、少々離れた所にいる2機に接近していく。

「くそつたれ……！」

最後の部下がリーダー機を庇うように前に出てきた、リーダーを逃がすための時間稼ぎといった所か。

「頭……！俺が時間を稼ぎます……！その内に撤退を……！」

「お。おいっ！」

「こいつ中々厄介だ……。」

レヴィンは毒づいていた、他の機体とは明らかに動きが違う。

「くっ……、そう簡単にやられてたまるかよ……！」

敵は間合いを的確に把握し攻撃を繰り返して来る。

「墜ちろ……！」

レヴィンは小刻みにブーストを吹かすのをやめ一気に敵MTへと間合いを詰める。

先程までのような戦法では長引いてしまうと判断、ブレードで墜とそうと考えた。

「なっ・・・!？」

今までの距離を保つての射撃戦からいきなり接近戦に切り替えられゲリラは対応しきれない。

”ザンツ!!”

レヴィンのブレードが敵MTを上下に両断する。

「な・・・何だと・・・あれだけの敵をこうも簡単に!？・・・、クソがああ、舐めた真似してんじゃねええ!!」

頭に血が登ったリーダーMTが突っ込んでくる。

『無謀だ、幾らこっちの機体が旧式だからってたった一機じゃ勝ち目は無い・・・、せつかく部下が時間稼ぎしてくれてたのにこうもあっさりと無駄にするとは・・・』

突っ込んでくる敵MTに対し、斜め左後方にブーストで回避しつつ距離を取りライフルの弾をぶち込む。

「ち・・・畜生ッ・・・」

「チェックメイトだ」

トドメと言わんばかりにブレードを振るうレヴィン。

爆発と共に敵MTは沈黙。

「ふう・・・、全くレヴィンをやめたのにまたACに乗ってやがる、困ったもんだな。」

と独り言を言いつつシートに身をうずめる。

静寂。

「敵熱源反応消滅、沈黙したものと認識。これよりシステム、戦闘モードから通常モードに移行します」

無機質なOSのアナウンスだけがコックピットに響いていた。

第九話（前書き）

久々の更新になってしまいました^^；

第九話

「いやはや、すまんね。助かったわい」

「いえ、俺は自分のできそうな事をしたまでですんで・・・」

A Cを降りた後レヴィンは村長であるラムミュの祖父と事の？末を話していた。

「しかし、驚いたの。又シがレイヴンだったとは・・・」

「いえ・・・その、正確には”元”ですけどね」

「じゃが、コーテックスの登録記録の削除を確認したわけでは無いのじゃろう？」

「ええ・・・まあ、そうですね」

そう、通常レイヴンが一線を退くときは基本的に登録情報を抹消し今までに請け負ってきた依頼の情報などを口外しないと言う誓約書を書かされる。

もつとも、その本人が”居なければ”その手続きは省略され担当オペレーターの同意だけで十分だが。

しかし、レヴィンはオペレーターにレイヴンを辞めると言う旨のメッセージを送って行方を暗ませてしまったので確実に消去されたかは怪しかったりする。

と言う事をガイルにも説明をしていた。

「まあ、昔に何があったかは聞かんよ。言いくいこともあるう？　まして知り合つて間もないワシらとではの？」

「居候中の分際で言えたことではないですが、そういう事にしてもらえると助かります・・・」

「なら、そういう事にしておいてやろう。」

「ありがとうございます。」

とりあえず一区切りついたのでレヴィンは気になっていた事を聞いた。

「あのA Cは何だったんです？　随分昔の機体でしたが・・・」

「あれか・・・？ あれはラーシャの夫、つまりラミュの父親の機体じゃ。」

「機体しか残ってないということは、もしかして・・・？」

「・・・まあ、そのもしかしてじゃな。あやつは悪い腕じゃなかった、そこいらのレイヴンには負けない腕じゃったが・・・。僚機に裏切られてしまったの・・・。」

「そうだったんですか・・・。聞いたいてあれですけど、すみません。」

「いや、別に怒ったりはせんよ。むしろレイヴンの世界、裏切り裏切られは当たり前じゃろう？ 所詮は何処まで行こうと傭兵でしか無いからの。結局油断を見せた者が死ぬ、お前さんも解っておるだらう？」

「まあ、そうですけど・・・。」

レヴィンはガイルのその態度に畏怖していた。

それもそうだろう、いくらレイヴンだったからとは言え娘の夫である男が殺されたのだ、普通ならもっと激情してもいいはずなのだ。

『昔に何かあったのだろうか？』

「して、これからどうするんじゃ？」

「いえ・・・、まだ具体的に何処に行こうとか全く考えてなくて。」

「全く、同じようもない奴じゃな。」

軽くため息混じりにガイルが呆れたようにつぶやく。

「此処には定期的に行商人が立ち寄っての。その間に手に入りづらいい物を互いに取引しているのじゃが。まあここいらに特産品なんてもんは無いからこちらが一方的に買ってるだけだかの。」

「えっと・・・。それでどうしろと？ まさかその商人に次の街まで連れつつ貰えって事ですか？」

「そういう事じゃ。此処にいても良いが登録も怪しい人間が無断でACを動かしたんじゃ、バレたら少々マズイじゃろう？」

「うつ・・・。確かに。」

いくら此処が辺境とは言え（住んでる人に失礼だが）さすがに目撃

者がゼロと言うことは無いだろう。それに宿屋にも何人が客がいたようだし。

それに居候させてもらっていたのだ。これ以上此処の人たちに迷惑を掛ける訳にもいらない。

「まあ、あと3〜4日くらいで来るはずじゃ、近くまで来たら連絡を入れてもらう手はずになっておる。それまでに決めておいてくれないかの？」

「分かりました。」

「うむ。ではそれまではたつぷりと働いてもらうとするかの。」

「は、はい・・・。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5372x/>

A r mored Core Another Story

2011年12月26日17時54分発行